

## 第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

### 命の値段

北海道 釧路町立富原中学校 三学年

阿部 倫歩

「えっ。人によって生命保険の受け取り金額が違うの？」

私は何げなく父母の生命保険について尋ねた時のことだ。生命保険の金額は皆同じだと思っていたので私はとても驚いた。話を聞くと父は数千万円で、母は数百万円ぐらいだという。父と母は私にとつてどちらも同じぐらい大切な存在なのに、なぜこんなにも金額が違うのか。疑問を抱くと同時に、命に値段がつけられているようで、なんだか嫌悪感も抱いてしまう。

父に頼んで保険のパンフレットを見てみた。そこには、数学の教科書のように難しい表や計算式が並んでページがうめられている。命の値段が機械的に表示されていて無機質な印象を受けた。

なぜ死亡保険の金額が人によって違うのかと父に聞いてみた。それは、もし生計の中心を担っている人に万が一のことがあっても、家族が経済的に困窮しないようにするためということだった。我が家の場合も父が生計の中心となっているので、私や弟が将来お金で苦労することがないように受け取り金額の多い保険に加入していると話してくれた。さらに父は、保険に加入してからはいつか死ぬことを心の片隅に置きながら日々の生活を送っている、とも話してくれた。いつもふざけて笑っている父からは感じられなかった。『死』という言葉に、私は胸を突かれた。

今日はちょうど終戦記念日。テレビで横浜大空襲と沖縄戦について特集しているのを見た。その当時は、一人の大切さよりも国のために命を捧げることが優先されていたから命の価値なんてほとんどないようなもので、実際に多くの人々が戦争によって命を落としまっている。やり残したことや、家族への想いを残して亡くなってしまったことは、とても無念だったと思う。また、残された家族の悲しみや絶望感、生活の困窮は、私の想像を超えるほどの苦労だったに違いない。現在でも毎日のように事故や災害、病気などで人が亡くなるという話を見聞きする。人が死ぬことの悲しみや無念さは今も昔も変わらないが、昔と違い生命保険の仕組みが整った今は、保険に加入していれば残された家族への保険金を残すことができ、経済的

## 第55回中学生作文コンクール

に救うことはできる。

最初に保険の話聞いてから、死について考えていくにつれ保険に対する見方が変わってきた。生命保険は命をお金に換算することだが、それは決して冷たい作業ではなく血のかよったものなのかもしれない。命の価値は金額で決めることはできないが、生命保険の中の命の値段は守るべき人への「想いの大きさ」を表していると思う。私の父にとってのそれは、私や弟が将来の夢や進学を諦めずに叶えられるよう応援し続けたいという想いが込められていると感じる。

ただ自分自身のこととなると「死」というものに実感が湧かない。実際、日本の若年層の保険離れが進んでいるらしく、収入の少なさが大きな理由だそうだが、私のように死について考える機会が少ないのも一因ではないだろうか。しかし、守るべき人がいるならば、生命保険のことを含めて将来を真剣に考える必要があると思う。

私は今回、生命保険を通じて両親の想いを知ることができた。命に値段をつけることには今でも少し抵抗はあるが、生命保険によって私たち家族が安心して暮らせると思うと、両親への感謝の気持ちがあふれてくる。私も命の価値を高められるよう、毎日を悔いなく生きていきたい。